



京都府立園部高等学校

授業改善の最先端を行く高校

「パフォーマンス評価を中心とした取り組み」

今回の訪問校は、京都府立園部高等学校である。

園部高校の校舎は、園部城跡に建ち、かつての城門が学校の校門という全国でも大変珍しい立地にある。園部城は、明治になって築かれた最後の城として知られ、現在も城門と櫓、城壁は当時の姿を残している。

歴史的建造物に囲まれ、地域に根差してきた園部高校であるが、新学習指導要領で重視される「資質・能力」を育てるカリキュラム、ルーブリック等のパフォーマンス評価の実践的研究で最先端を行く学校でもある。

筆者は、今年2月10日に行われた園部

高校教育研究発表会に参加し、教員による実践報告を聞き、生徒の多彩な実践発表を見学した。その後、永井正人校長、前野正博副校長、取り組みを推進してきた田中容子指導教諭にお話をうかがった。

パフォーマンス課題とは、様々な知識やスキルを総合して使いこなすことを求める複雑な課題のことで、レポートやリーフレット、プレゼンテーションなどによって理解の深さを評価する課題である。それを評価するのがパフォーマンス評価で、知識やスキルを置かれた状況ごとに使いこなすことを求める評価方法の総称である。

こう言うと、いわゆる難関大学をめざす進学校の話かと思われるかもしれないが、園部高校は幅広い学力の生徒たちに応じる地域の学校であり、人権教育の観点から生徒の多様な進路実現を果たす学力保障が大切にされてきた。パフォーマンス課題に取り組むのも、どうしたら生

徒の学習意欲を育み、学力を保障しているのかと苦心した末のことであったという。

現在の学校挙げての取り組みがスタートした年ともいえる2006年（スーパー・イングリッシュ・ランゲージ・ハイスクールⅡSEELHiの指定を受ける）、授業開始のチャイムとともに寝てしまう生徒を前に「どうしたら起きて授業受けてくれるの？」と田中教諭は生徒たちに問いかけたという。

そこから、「英語だけを使ってホットケーキを焼く」「英語だけを使ってトランプゲームをする」といった学習課題が生まれていった。学習に困難のある生徒に英語活用の力をも身につけるためにはどのようにしたらよいかを議論し、実践を重ねてきた上に現在の取り組みがある。「真正の課題」によって生徒の学習意欲を喚起し、成果を評価するルーブリックの開発によって生徒の力を伸ばしていく園部高校の取り組みを紹介していこう。